国語科学習指導案（２年１組）

令和３年 10 月７日（木曜日）10:20～11:10　２の１教室

１　単　元　「彼」に救いはあるのかどうかについての自分の考えを広げたり深めたりして、ミニ論文に表そう（教材名「夏の葬列」）

２　単元の目標

(1)情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うことができる。

(2)文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

(3)言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。

３　単元設定の理由

(1) 教材観

①単元の価値

本単元は、「夏の葬列」に登場する「彼」に救いはあるのかどうかを批評してミニ論文に表す活動を通して、自分の考えを広げたり深めたりする力を高めていくものである。

本題材では、「彼」が幸福の絶頂から奈落の底に、一気に突き落とされる。ここで、「彼」の心情の変化を展開に沿って捉えていくためには、叙述から心情の変化が分かる部分と根拠となる部分を抜き出し、線や矢印を用いて結び付けさせることが有効であり、情報と情報との関係の様様な表し方を理解し使う力を高めることができる。また、「彼」に救いはあるのかを自分なりに批評するためには、叙述と自分の知識や経験とを結び付けることが不可欠であり、考えを広げたり深めたりする力を高めることができる。

②単元の系統性

・第１学年では、「少年の日の思い出」に登場する「僕」がチョウチョをこなごなに押し潰してしまったことの意味を説明する活動を通して、叙述に基づいて、自分の考えを確かなものにする力を高めてきた。

・第３学年では、「故郷」に登場する「私」や「閏土」、「楊おばさん」に表れているものの見方や考え方を批評する活動を通して、人間や社会について、自分の意見をもつ力を高めていく。

(2) 生徒観（男子 18 名、女子 16 名　計 34 名）

・知識・技能については、説明的な文章「日本の花火の楽しみ」と「水の山　富士山」における筆者の説明の仕方の工夫を比較しながら読む活動において、12 名の生徒が共通点と相違点のそれぞれに、22 名の生徒が複数の共通点と相違点に気付き、各自のノートに線や矢印を描き込んで結び付けるなど、情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うことができていた。これは、事前に、それぞれの文章における論理の展開を把握しておいたことが要因である。

・思考･判断･表現については、文学的な文章「タオル」における振り返りの記述分析から 15 人の生徒が他の生徒の考えを聞いて、自分の考えを再構成しておらず、自分の考えを広げたり深めたりすることができていないことが推定される。これは、解釈が異なる問いにおける話合いの意義が実感を伴って理解されていないことが原因である。

(3) 指導観

・「つかむ」過程では、語り手が三人称限定視点であることと、「彼」が「自分」と「おれ」と併記されていることを押さえさせることで、「彼」の内面が描かれている作品であることを理解できるようにする。

・作品の範読を聞かせた後に初読の感想を書かせる。次時に、感想を共有することで、多くの生徒が「彼」に救いはないと考えていることを理解できるようにする。

・一つの論文を取り上げることで、「彼」にとって悲劇ばかりではないという読み方も可能であることを理解できるようにするとともに、自分はどう考えるのかという今後の学習の見通しをもつことができるようにする。なお、生徒が表すミニ論文は、「主張」、「引用」、「理由付け」の三つの内容から構成されるものとする。

・「追究する」過程では、叙述から心情の変化が分かる部分と根拠となる部分を抜き出させることで、「彼」の心情の変化を捉えることができるようにする。なお、線や矢印を用いて結び付けさせることで、自分なりに情報を整理できるようにする。

・心情の変化を整理したノートをタブレット端末で撮影させ、ロイロノートにアップロードさせて、構成を操作させることで、物語の時間的な設定とは別に本来の時間の流れが存在することに気付くことができるようにする。
・第二場面が回想場面であることの表現の効果を考えさせることで、第三場面に回想場面があることの表現の効果を考えやすくする。
・第三場面に回想場面があることの表現の効果を考えさせることで、読者を作品の世界に引き込む作者の意図に関わらず、「彼」の思考を読者が追体験しやすくなっていることにも気付くことができるようにする。
・第五場面において、「この町」に降りた理由を押さえさせ、最後の二文の意味を考えさせることで、作品を読んで理解したことや考えたことをより確かなものにすることができるようにする。
・ミニ論文を書く前に、「彼」に救いがあるのかどうかに対する自分の考えを語り合わせることで、自分や読書を通して得た知識、経験と結び付けた理由付けが批評には必要であることと、他の生徒と理由付けが異なるからこそ話合いの意義があることを実感できるようにする。
・「まとめる」過程では、これまでの学習をミニ論文として表出させることで、これまでの学習とともに他の生徒の意見を参考にして、自分の考えを再構成できるようにする。

4　指導と評価の計画　国語科　２年（全６時間計画）

単元「『彼』に救いはあるのかどうかについての自分の考えを広げたり深めたりして、ミニ論文に表そう」

目標	(1)情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うことができる。 (2)文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。 (3)言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。 本単元における言語活動：「彼」に救いはあるのかどうかについての自分の考えを広げたり深めたりして、ミニ論文に表す。		
評価規準	知識・技能	思考･判断･表現	主体的に学習に取り組む態度
	①情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使っている。(2)イ	①「読むこと」において、文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりしている。　C(1)オ	①進んで自分の考えを広げたり深めたりして、今までの学習を生かしてミニ論文に表そうとしている。

過程	時間	◎目標・課題	○学習活動	重点	記録	備考
つかむ	1	◎登場人物の設定の仕方を捉えることで、本文の大筋を理解することができる。 物語の大筋を捉えよう。	○範読を聴く。 ○どのような話か30字程度でまとめるとともに初読の感想を書く。 ○語り手と呼称など、登場人物の設定の仕方を押さえる。			本時は、C(1)アに基づいて学習状況を捉え、指導を行うが、単元の目標としていないことから、本単元の評価には含めない。 ★学習用語「語り手」
	1	◎初読の感想と論文を比較することで、本単元の課題をつかむことができる。 単元の課題を設定しよう。	○初読の感想を共有する。 ○西原(2002)の範読を聴き、悲劇と読み取らない読み方もできることを知る。 ○単元の課題を共有する。	態		態①：行動観察 記述分析
		単元の課題：「彼」に救いはあるのかどうかについての自分の考えを広げたり深めたりして、ミニ論文に表そう。				

追究する	1	◎登場人物の言動の意味を考えることで、「彼」の心情の変化を捉えることができる。 「彼」の心情はどのように変化しているのだろうか。	○振り返りを共有して、「彼」の心情の変化を捉えることを確認する。 ○「彼」の心情が変化したことが分かる叙述をノートに抜き出す。 ○変化の根拠となる叙述を抜き出して、心情の変化と線や矢印を用いて結び付けることで、関連付ける。	知	○	知①：行動観察 記述分析 ・「彼」の心情の変化と根拠となる叙述を線や矢印を用いて結び付けることができる。
	1（本時）	◎場面の時間的な設定と時間の流れを比較することで、表現の効果を考えることができる。 回想の場面は何のためにあるのだろうか。	○場面の時間的な展開と本来の時間の流れを比較することを確認する。 ○ロイロノートを用いて、場面の展開と本来の時間の流れを比較し、回想の場面があることの表現の効果を考える。 ○第三場面において、回想があることの表現の効果を考える。	本時は、C(1)エに基づいて学習状況を捉え、指導を行うが、単元の目標としていないことから、本単元の評価には含めない。		★学習用語「設定」
	1	◎「彼」に救いがあるのかどうかを批評することで、「彼」の言動の意味を知識や経験と結び付けることができる。 「彼」に救いはあるのだろうか。	○振り返りを共有して、いよいよ「彼」に救いはあるのかを検討することを確認する。 ○第五場面を読んで、感じたり考えたりしたことをグループで聴き合う。 ○「彼」に救いはあるのかについて、これまでの学習を基に考えて、ミニ論文の主張と引用部分を書き留めておく。	思 態	○	思①：行動観察 記述分析 態①：行動観察 記述分析 ・「彼」の言動の意味を知識や経験と結び付けて語り合ったり、気付いたことをノートにメモしたりしようとしている。
まとめる	1	◎ミニ論文にまとめ、伝え合うことで、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。 自分の考えをミニ論文にまとめて読み合おう。	○西原(2002)を再読して、ミニ論文の内容とともに書き方を確認する。 ○ミニ論文の理由付けの部分を書き留める。 ○提示された型に沿って、ミニ論文を書く。 ○ペアで読み合う。 ○どのような話か30字程度でまとめ、第１時のまとめと比較する。 ○本単元の振り返りを記入する。	思	○	思①：記述分析 ・「彼」の言動の意味を知識や経験と結び付けて、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

＜引用文献＞
西原千博（2002）「『夏の葬列』試読―国語科教材のテクスト分析の試み―」（『語学文学』40 巻）北海道教育大学語学文学

５　本時の展開　（４／６）

(1) 目　標

場面の時間的な設定と時間の流れを比較することで、表現の効果を考えることができる。

(2) 展　開

学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点及び支援・評価
１　本時の課題をつかむ。 ・前時は「彼」の心情の変化を捉えたけれど、場面の展開と時間の流れが異なっていて、把握しづらかったな。	○本時はＣ(1)エに基づき指導を行うことで、時間的な設定から、「彼」の思考を読者が追体験しやすくなっていることに気付かせることを目的としている。 ○「学びナビ」を参照させることで、本時は文章全体ではなく、第二・三場面における回想場面の「（時間的な）設定」にのみ注目させるようにする。
課題：回想場面は何のためにあるのだろうか。	
２　課題を追究するために個で考える。 ○第二場面があることの表現の効果を考える。 ・「彼」が「この町」に対して消極的であることを先に描くことで、読者は先が気になるように仕組まれているな。 ・「少年の日の思い出」のように、読者が自由に想像を膨らませることができるのかもしれないな。	○前時のノートを撮影して、ロイロノートのカードとして操作させることで、第二場面が回想場面として挿話される構成となっていることに気付くことができるようにする。 ○「なぜ回想があるのか（第一場面ではないのか）」と問うことで、回想場面が挿話されていることによる表現の効果を考えることができるようにする。 ○表現の効果を考えることが困難な生徒に対しては、「少年の日の思い出」が回想場面で終わることの効果（現在の場面を読者が想像できること）を考えたことを想起させることで、読者にとってどのような効果があるのかに限定して考えられるようにする。
３　グループや全体で、課題を追究するための考えを確認し合い、新たな気付きをもつ。 ○第三場面における回想場面があることの表現の効果を考える。 ・ここで、「彼」が「町を去った」ことで、やま場における「彼」の心情の変化がより大きくなるな。 ・「彼」という人物が存在したら、やはり同じ場面で同じように思い返すのではないかな。 ・読者が興味をもって読み進めることができる効果と「彼」と読者を一体化させる効果の二つがありそうだぞ。	○回想の場面がもう一つあることを伝えることで、第三場面の後半部も回想の場面であることに気付くことができるようにする。 ○第三場面における回想がなくても物語は進むことを確認させた上で、「なぜ回想があるのか」と問うことで、表現の効果を更に深く考えられるようにする。 ○他の生徒の考えを聴くときには、気付いたり、思ったりしたことをメモに残すように促すことで、様々な効果があることに気付くことができるようにする。 ○第１時で「彼」、「自分」、「おれ」を比較したことを想起させることで、「彼」の内面についても考えることができるようにする。 【思考・判断・表現】 場面の時間的な展開と時間の流れを比較し、表現の効果を考えることができる。（行動観察、記述分析）
４　本時のまとめ・振り返りをする。	○振り返りを記入する際には、学びが深まったと感じる場面を具体的に想起させることで、どのように学んだのかについても自己評価できるようにする。

＜まとめ・振り返り＞

・設定の効果を仲間と考えるときにＡさんの意見を聴いて、「彼」が過去に囚われている理由が少しずつ明かされる展開になっていることだけでなく、「彼」と同じ思考を読者にもさせようとする展開になっていることにも気付いた。どちらも読者を作品の世界に引き込む効果があると思う。

＜「学びの質」を高めるための具体的な手立て＞

・「学習用語」を身に付ける活動とテクストの再読を結び付けた単元の設定

・デジタルシンキングツールを活用した思考の可視化の工夫